
~ Esper ~ 何でも屋営業中

みつほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「 Esper 」 何でも屋営業中

【NZコード】

N3942A

【作者名】

みつほ

【あらすじ】

高校生優輝は、ある日。英樹と椎に出会う、その二人は、誰も信じられない能力を持つていた。Psi一般的には超能力と言われている。出会った優輝も実は、ちょっとした能力が…何でも屋を中心 にバタバタと繰り広げる不思議な話し

事件と能力は紙一重（前書き）

超能力、これは、少し興味がない人は興味がないような話です。ちよつと「マニアふうになつてているものも多いため、もし、「こんな小説認められない」という方がいらっしゃるのなら、見ずに限ります。」 そう言う話が好きな方は、読んでみてください。

事件と能力は紙一重

ビルが立ち並ぶ普通の街並みの都会
その、とある街中の道路で、交通事故が起こった。

運転をしていた男性は叫ぶ

「俺じゃない……違うんだ」

それを、誰が信じてくれると言つのだろうか、だが、その人は頼む
よつこ、青ざめた表情で叫んでいる。

側のビルの上では見物をするかのように、煙が上がる事故現場を、
身を乗り出しながら見ている一つの影がある。

その影は、どうやら男、首にバンダナを巻いて、二十歳前後で、
見たとおり仕事もせず、遊んでいるよつな印象を受ける格好をして
いる。

その男は、クスッと笑う。

「ああ、やつてゐなあ……今日も派手なこと」

そう、独り言のように呟いた。

彼の名は、浅茅英樹

遊んでいるような容姿だが、彼には彼なりの仕事があった。今、このビルの上にいるのも、仕事の一つ……いわゆる、任務である。

「んー……俺、役たたず」

手すりで「ロロロロしながら、事故現場に目を下ろして」いる。

すると、野次馬のある一定の場所に眼をやつた時、彼は何かに気がついた。

「……」

ガバッと体を起こして、口元がほころび

「……ビンゴ」

そう呟くと、強く念じる

『しーちゃん、見つかったぜ？あいつ、薄い灰色の半そでのおつち
やん・・・あいつだ』

『・・・珍しく早いな お前も、現場に来い』

『ういっす！』

そう、これが、彼の仕事・・・実を言つと彼には人とは違つ力を持
つてゐる。

英樹は回線らしきものを落とすと、その場を退散しようとすると
だが、警備員らしき人が屋上に来てしまった。

「な、何だね君・・・君のような者が来る場所じゃ 」

「はーいはーいはーい、分かつてゐつて、すぐ退散しますよ～」

だが、そもそも簡単にはいかないのが、会社のビル

「待ちたまえ、少し話を聞かせてもらおうか？」

「ちょ、俺、急いでんの・・・んなの後で」

すぐに、耳元でキーンと耳鳴りが起こる。

『何してるん、早うせい！』

「だーもう、ううとうしい

英樹は、警備員の頭に手を置き田と田を合わせた。

警備員は最初、警戒した態度だったのだが、何もなかつたかのよう
に、その場からいなくなつてしまつた。

英樹も一息入れると、現場へ走り出した。

「しーちゃん・・・・あれ？」

「・・・・・・・・」

「・・・あ～・・・逃がしちゃいました？」

現場には野次馬はいるが、探している人物はもういなくなつてしま
つていた。

そして、英樹が話しかけた人物、身長が高く、スースが似合つよう

な男、一言で片付ければ頭がよそそうな人だ。表情からしてとても、クールだが、今は怒りが爆発しそうな表情をしている。名前は椎と、いう・・・それ以上、自分を語らない。

「なぜ、お前はすぐ来んのや・・・」

「・・・あ、け、警備員のおっさんがさ・・・」

彼は、どうやら怒ると関西弁が出るらしい。

「このアホが！あれを使えばええやろうが！」

「んな事、言われたつて・・・めんどいし」

この一人にとつては、いつもの会話だが、このミスは、ちょっとした出会いを引き起こす事となる。

そして、こいつらは第六感である、いわゆるサイコを持つている。さつき警備員にしたのは、「マインド・コントロール」名前しか聞かない事が多いし、催眠術で有名だ、だが・・・彼、英樹の得意の能力である。

そして、野次馬の中で当てた、あれは「シンクロニシティー」と言う。あれは、同じ能力者が少しでも力がぶつかると分かる事なのだ。後は、一般的には、「テレパシー」と、思われるだろうが、それとは違い「コネクト」と呼ばれている。使い方は色々ある。が、2人は、これで会話をしている。だが、使うには頭が少し痛くなるようだ。

これと「シンクロ」は、能力者全員にできる事である。

彼らの仕事・・・いや、やっている事は自分達と同じ能力を悪用するやからをなくせうとしている事、だが、それは「裏」であり、表は「何でも屋」をしている。

「あ～…どうしようか、しーちゃん」

「どうするも、こうするも、何もできないから…戻るぞ」

二人は、その場を後をにした。

勿論、自分達の事務所へと

事件と能力は紙一重（後書き）

ここまで読んで下さって有難うござります。最後はあんな書き方になつてしましましたが、実は超能力とは言いがたいですが、数通りあるようです。まだ、名前しか知らないものが多いですが出していたらと思っています。

つまらなそうでしたら、すぐに切り上げる話なので、この凸凹2人を暖かな日で見ていてあげてください。

その後の一人・・・

都会の裏と言うべき場所に、少しほろいビルが一つある。廃屋と言つていいビルだが、ここに英樹と椎がいる。

少し階段を上るとドアの前には、何でも屋の看板がある。一応営業をしれているようだ。

「なあ、しーちゃん。この事件、今日もあつたみたいだな」

英樹は、古いソファーに寄り掛かり、テレビのニュースをみながら椎に言う。ニュースでは、事故扱いになつていて。一般的に言えば、ただの交通事故なのだから、仕方がないと言えば仕方がない。

「お前がすぐ来れば、こんな事は防げたんだがな」

まだ根に持つているのか、突っ掛かる椎。

「悪かつたつて・・・でも、しーちゃん 一人でも平氣だつたんじ

「

「ほう？英樹・・・分かつて言つとるんか？力を使う時、どうなるか言つてみい」

「すんません、もう言わない・・・」

「

英樹に言わせようとしていたのは、能力（力）の事なのだ。

一人が、力を使つている間は動きが鈍くなる。ほとんど何も出来なくなるのだ。それは、欠点であり、一人で行動できない理由でもあります。つまりする。

「でも、どうするんだよ・・・逃がしちやつたけど、顔分かつたんだし追いかけて」

「アホか・・・シンクロしたつて事は、向こうつも“気がついている”つて事だらうが」

眉間にしわを寄せながら椎はため息を漏らす。

「まあまあ、現場に行つてみよつぜ？どうせ、人なんか来ねえつて！」

英樹は立ち上ると、ドアを開ける。

「はあ・・・来ないつて事は、金も稼げないつて事なんだがな」

そう、言葉をもらしつつ椎も一緒に外へと行く事にした。

歩きながら2人は、例の事件の話をする。

「あれつてやつぱり、俺と同じ、マインド・コントロールつてやつかな？」

「いや、そうとも限らない、もしかしたら違う働きを持つた力かもしれない」

「違う力つて・・・俺、ぜーんぜん、分からね」

「それは、お前が考えようともしないからだろ？」

こんな会話を周りが聞いたら、多分、変な人たちに思える事だろう。ピンつと何かがよぎつた、言葉で表すことができない。体に電気のようの一瞬、走つたのだ。

英樹と椎は、振り向いた。横を見たりもした。だが、そのピンと来た人物が見当たる事がなかつた。

「なあ、さつきの感じつてさ」

「・・・シンクロの感覚だ」

人込みの中でたたずむ2人、ただ黙つて、人込みを見渡しているのであつた。

その後の一入・・・（後書き）

この話は、超能力・・・っぽい、話なので、「この力の意味が違う気がする」つと、思つても小説でと言う事で見逃してください。でも・・・シンク口は同じ力が交わるって意味があるので、こうなった限りです。

プリマクニション（前書き）

今回は、結構長くなりました。

読んでくださる方々、有難うござります。

これでは、少し人物を掘り下げるのに力を入れてみたつもりなので
すが・・・多分、少し余分な事になっている気がします・・・（汗）
気にせず、見てください。

プリパレーション

街で飛び交う話は、起じる交通事故の話、周りは、事故やら祟りやら幽霊やら騒いでいる。

そんな街中を、紺のブレザー、灰色のネクタイの制服を着た高校生の男の子が、歩いている。とてもつまらなそうに、周りが勝手に流している話題を耳に入れる。

（はあ・・・よぐ、同じ話題で、会話が途絶えないよな）

そんな事を、思いながら歩いていた。

彼の名は、たかさき ゆうき高崎優輝

彼の身の回りでは、色々な事が起きている。それは、街で騒がれている事故どころではない・・・つと、彼は思っている為、周りの話題が、馬鹿らしく感じているのだ。

でも、彼の方にも確信が持てないぶん、困っている。

今、優輝は学校へ行く途中・・・いつもの通いなれた道、商店街を歩いている・・・すると、ふと、彼の周りの景色が音もなく、“飛んだ”それでも、彼の方は慣れているのか、冷静だった。

「また・・・?でも」

見た感じは、いつもの商店街・・・だけど、景色は違う・・・午後はまわっているのでは、ないだろうか。彼は、歩き始めた、勿論・・・学校に行く為だろう、商店街も活気とは、そのまま、何も変哲もない。

なのに、優輝の方は、ゆっくりと足を動かして歩く・・・何かに警戒をしているようだ。

そして、交差点にさしかかった。

ここまでなんて事もないと、逆に彼に安心感が出る。

だが、安心したのもつかの間、青になつた信号を渡ろつとした時、右側から暴走したかのように走つてくる車が見えた。

「つな！？」

赤い、しかもまだ新しい何処かのメーカーの車・・・それは、止まらないのか、止められないのか、優輝めがけて走つてきた。

「うわあ！」

ガクンシと、体が落ちた感覚で彼は、ハツとする。

そこは、いつもの・・・いや、いま歩いている道、周囲では、嫌になるあの話題を話している人たち、そして、まだ午前中・・・立ちくらみがして、道沿いの壁に寄りかかる。体が思うように動かない、石みたいに重い。それどころか、嫌な汗をかき（冷や汗ともいう）少しだが、体温が下がつているを感じた。

「な、なんだつたんだ・・・さつきの・・・は、俺、やっぱり、頭おかしいのか？」

そう思いながらも、重い体を起こして、ふらつきながらも、学校へ足を運ぶのだった。

* * *

あの男の子がいた、商店街の近くの道沿いでは、椎と英樹が歩いていた。

「あれえ、見失つた・・・“感覚”がなくなつたぜ」

悔しそうに英樹は言った。

「・・・遠ざかつたか、それとも、力を使い切つて、意識が途切れそうなのか？」

冷静に椎は、考えながら呟く。

「あ〜、追いかけて損だぜ・・・腹減つたな〜、しーちゃんメシ奢つて〜」

椎にまるで猫の様にたかる英樹、その英樹を小突いて歩き出す。
「いつつ～～！でつかい音が出ない分、めちゃくちゃ痛いんすけど
？」

「・・・お前な、外のメシ食つとる金があるんなら、あのオンボロ
建物の修理に使うとるやつ！？」

負けじと英樹も反撃

「なんだよ、『家賃、払つてからならボロイの買つた方がマシや！』
と叫んで、しかも、買う場所を値切りまくったの誰だよ・・・?
『こんなボロいのに、そんな10単位の金が払えると思つているの
か?しかも、なんだこの壊れた壁は・・・ボッタクリだ』ってや』
自慢げに覚えてる言葉を口にし余裕を顔に出す。

どうやら、椎は、見た目に似合わず、貧乏性の様だ。

「それに」

「よう分かつた、奢つたる・・・せやから、もう、それ以上、こ
んな街中で言わんといてくれ」

ほのかに顔を赤らめながら、そう言った。

「うし！肉まんが食いたい・・・あ、でもたまにはファーストフ
ードって言つのも・・・」

「もう、どうでもええ・・・」

「良くないよ・・・安いのを買つんなら、やつぱり肉まん2個か・
・いや、だったらファーストフード店で、セットのを」

「はあ・・・（なんだか、何しにこんな場所まで歩いてきたのかよ
う分からん）」

椎は、怒つた時だけではなく、呆れた時も関西弁が出るようだ。

* * *

高校では、授業がもうすでに始まっていた。2時間目くらいだらうか、彼のクラスでは数学が始まっていた。

音を立て、クラスの前のドアが開く、そこには息を上げた、高崎優輝の姿があった。

「すみません、遅くなりました！」

「ん・・・? また、体調でも崩したのか高崎・・・」

呆れたような声を上げる数学教師

「すみません」

そう、一言、言ひと、席に着いた。

教師の方もそれ以上言わず、そのまま授業を再開する。

「え~・・・この数が、こうのように、くりあがると」

優輝もため息を付きながら、鞄から教科書類を取り出して、机に置く。すると、隣の席の友人が、小声で話しかけてきた。

「おい、大丈夫かよ・・・てつくり、事故でもあったかと思つたぜ?」

「事故?」

「ああ、だつてよ、今多いじゃん“交通事故”が、だから巻き込まれたつて思つてよ!」

すると、さらに斜めの友人も話しかけて来た。

「あ、あれだろ? 交通事故起こした奴ら、皆『やつてない、俺のせいじゃない!』みたいな奇声を一点張り・・・裏噂では、何かのテロじやないか・・・なあんてのもあるらしいぜ?」

「まじかよ・・・」

「・・・・(交通・・・事故)」

ふと、学校に来る前のあの光景を思い出す・・・蜃氣楼の様な、現実的なあの、“夢”のような光景・・・

「おほんつ・・・」

ハツと気がつくと、教師が立つていた。

「そんなに、私の授業が簡単すぎてつまらないなら、君らには、まだやつていない所を宿題にして出してやるつ

眉間にしわをよせていわれる。

が、なんとかその場を切り抜けると教師は、黒板に戻ってしまった。友人達は、さらに声を小さくして話す。

「だったら

「じゃあ つて事?」

だが、彼は友人の会話より気になつていて、事があつた。交通事故、もし、あの“夢”のよつた出来事が本当ならと思つと、彼は背筋がゾツとした。

だから、考えた。

“あの後、何があつたのか” つと

その時、また彼の周りの景色が“飛んだ”

それは、あの午後の時間、交差点で信号待ちをしている時だった。信号が青になると人が次々に渡つて行く。この後、何があるのかは、彼にも分かっている。だからこそ、動く事が出来ないでいた。それでも、覚悟を決めて信号を渡る。と、右側から、あの暴走したような車が走ってきた。また、同じ光景・・・足がすくんだ、だが、何とか避ける事はできた。

通り過ぎていく車を見つつ

「・・・避けられたのか」

そう思い、胸を撫で下ろした時、車の前に小学生が飛び出し

「！！」

ガタタン

椅子が倒れた。それは、優輝の椅子・・・

景色は戻り、場所は学校の教室の中、いきなり立ち上がった優輝にクラスの仲間達は驚いている。優輝は、机に両手をついた。

「大丈夫か？優輝……？」

「どうした高崎？」

友人や教師が心配して声をかけるが、周りの声が聞こえていないようだ、彼の汗ばんだ顔からは汗が机にしたたり落ちる。

「はあ、はあ……そんな、まさか」

そう、言った瞬間、彼は床に崩れて倒れた。

田を覚ますと、白いカーテンが田に付いた。風も気持ちが良い……。どうやら、保健室のようだった。友人達が連れてきたのだろう。鞄まで置いてある。

顔を横に向けると、養護教諭（保健の先生とも言つ）の教師が居るのが分かる。

「授業は……？」

声をかけられて、驚きもしないで、その教師は立ち上がり、優輝に近寄りながら言つた。

「今日は、午前中までらしいじゃない？もう、今日は下校ね」

「そうですか……」

そう言つと、立ち上がろうとした。

「つ……」

「まだ無理なんじゃない？休んでいきなさい、帰りに倒れられても困るもの」

だが、休みたいのもやまやまだつたが、どうしても確認したい事があつた。普段だったら、偶然で済ませられた事だったが、今度は自分だけの問題じやない気がした。

「帰らせてください……いえ、帰らないと、いけない気がするんです」

それを聞いた、養護教諭の教師は、小さなため息を付いて、デスクの椅子に座ると言った。

「いいわ、担任には、私から事情を話しておきましょ？帰つていわよ？」

そう言つと、背を向けて仕事をまた再開し始めたのだつた。

優輝は、教師の背に頭を下げると鞄を持って慌てて、学校を後にした。

商店街につくと、あの“光景”で起る小学生を探す。だが、見つける事が出来ない。

やつぱり“夢”だつたのではないだろつか……。そう思いながら、商店街の中を見渡しながら探す。が、気がつくと例の交差点に差し掛かつてしまつた。

小学生に会わなかつた。あれは、やつぱり“夢”だつたんだと、思い、諦めて信号待ちをして家へ帰ろうとした。信号が青になり、わたつていると、右側から何かが走つてきた。

優輝は、それを見た事があつた。色は赤くて しかもまだ新しい車が暴走して優輝めがけて

「！」

避けた。その車は通り過ぎてく

「そんな・・・小学生には！」

そう口にした時、もう一つ先にある交差点で小学生が沢山渡つて歩いていた。

「つ・・・！」

彼の今の距離からだと間に合つわけもない。

だけど、小学生達は、車が近づく前に渡りきつてしまつた。

「・・・よ、よか！」

すると、あと一人、遅れて走つてくる小学生が見えた。車はどんどん、その交差点に近づいてくる。

「！」「

“誰か あの子を助けて！車が”

”

もうだめだ。見ている誰もが思つた・・・だが、小学生の後ろから、強く手を掴んで、行くのを止める影があつた。勿論、その小学生は驚いている。その前を暴走した車が通り過ぎ、曲がる事もなく、一軒の家めがけてぶつかると、大きな音を立て、動かなくなつた。

優輝は、安心したせいか、腰が抜ける。

「良かつた・・・助かつたんだあの子」

でも、車の方は、運転手は助かつていながら分かるような光景が広がつていた。

（・・・あの人は、助けられなかつたのか）

そう、思った時、優輝の前に2つの影が現れた。

バンダナをつけた男に、眞面目そうな男・・・あまりにバランスが取れてない二人をみて優輝は啞然とする。

「お前もサイコか！？」

バンダナの方の男が聞いてきた。

「・・・はつ？」

「・・・それでは、分かるわけないだろ？？そうだな、サイコと言うよりESPって言われたりなどしているのだが？」

もう一人の男が、軽く説明をしてくれた。

「イーエスピー？」

「エスパーつて事だ！」

「ああ、^{エスパー}ESPer・・・つて、誰が？」

納得した後の疑問は大きい

「お前だよ、お・ま・え！」

バンダナの男に突つ込まれる。

「さつき・・・「メッセージ」送つてきただろ？たまたまキヤツチ出来てね・・・朝もシンクロしたが、それも君だろうと、思つたんだ」

「シンクロ？メッセージ？？」

「案の定、bingo！つてところだな、しちゃん」

訳の分からぬ事を優輝の目の前で起こつていて。分からぬ事が、

だんだん、イライラした気持ちにさせる。優輝に、もう一人の男・・・
・しーと呼ばれていた方が尋ねてきた。

「君は、どうして、あの子が轢かれるって分かつたんだ？」
すごく、真剣な顔して言われる、だがそれ以前に優輝にも疑問があ
つた。

「どうして、俺が轢かれる子を知つてると思つんですか？」

「はつ？ だつて、お前が“メツセージ”送つたんじやん？」

バンダナの男にそう言われて、さらに混乱をする。

「ま、待つて、ちょっと待つて・・・俺、全然話の流れがつかめ
ないんですけど？！」

2人の男達は、顔を見合させた。

そして、バンダナの男が、優輝に話をふつた。

「此処で会つたのも何かの縁だしさ、俺らの“家”に来ないか？」

「え・・・家、ですか？」

「いや、事務所だ・・・」

そう2人にそう言われたが、さつきの会話といい、いまいちついて
行くにも、信用できない優輝、そこに、しーという男が言った。
「君が、知りたい・・・その疲れる原因・・・教えてあげられなく
もないんだが。どうだろう？ 知りたくないか？」

「えつ！ 知つてるんですか？」

「勿論、俺らがちやんと、教えてやるぜ？ 同じ仲間みたいなもん
だしよ！」

「・・・分かりました。話を聞くだけですから・・・」

付いていく事を決意した優輝に、2人の男は自己紹介をし始めた。

「俺は、椎だ・・・つで、こいつは、英樹」

「浅茅英樹っていうんだ、宜しくな？」

「あ、あの・・・俺は、高崎優輝です」

すると、救急車とパートカーがやって来た。それを見た英樹は、慌て
て優輝の手を引いて歩き出した。

「ど、どうしたんですか？」

「いや、警察に捕まつたら、めんどいじゃんっだから、そつぞと俺らの“家”に行こうぜ？」

「はあ・・・（なんだか、やつぱり怪しい）」

そう思つ、優輝だった。

だが、これが事件から起つた、出来事であつたことは・・・この3人は、知るよしもない。

プリコグニション（後書き）

間違った知識を送ってしまった方も（いらっしゃいます）居ると思うので、少し訂正 サイコ・・・と、いつも ^{より} P.s.i と書つのが、一番正しい言い方です。これは、E.S.P.（もつと長いですが）とPKの2つをさします。まとめて P.s.i と呼ばれます。今回の、優輝と言つ少年が使つたのは『予知』英語名はプリコグニションといいます。この少年も加わり、交通事故の謎を解いていらっしゃいます。

P.s.i は、本当に体力を使うんですね。使いすぎると、倒れる人がいるみたいですが・・・本当ですかね？（私も、確信がないもので・・・すみません）

そして、チャット・・・メールで、助言を下さつた方々にお礼を言いたいと思います！有難うございました。

Psi(サイ)(前書き)

助言を下された方がいらっしゃるので、直してみましたが、上手く直せませんでした。

ボロイ事務所、そこに似合わない綺麗なソファーに優輝は、頑なに座っている。

「あ、あの、ここは？」

「家」

「ちがう……ここは俺達が経営している『何でも屋』と四つ場所なんだ」

「何でも屋ですか？」

優輝には、しつくりこなかつた。建物 자체が古くて壊れそう、どう見ても廃業しているようにしか見えない。優輝は、あたりを見渡していると英樹が、顔を覗き込んできた。

「！（ビックリした）」

「何でも屋は、表の顔つてやつで、もつひとつ、違うのをやつてるんだぜ！」

嬉しそうに話す英樹を、椎は止めた。

「ちょっと待て！いきなりすぎるだろ？俺が順々に話すから、お前は黙つてろ」

「ちえ～」

反対側のソファーに腰を下ろした椎は、優輝を見る。

「君は、『予知』ができるね？」

「予知……あれは、予知って言うのですか？」

驚いた優輝は、立ち上がる勢いで椎に聞き返した。

「英語名は『プリコグニシヨン』と言われるが、君の場合は少し特殊だなど、俺は思う。普通は、近い未来を知る事。か、ほぼ自分の周りをやつと見れる。相手まで、気が回る事がない」と、俺は聞いていい

「へへ、なんだ。しーちゃん凄いな」

英樹が話しに割り込んできた

「・・・君の場合は“ESP”の可能性もある

優輝は、少し考へると、椎に質問した。

「それってESPって事ですか？」

「いや、これは、本当にESPと言つものなのだが、詳しきはいや、まだ決まつたわけじゃないから、ここまでにしておけつ

「え、教えてくれないんですか？」

「まあ、我々と行動を共にしてくれると云つのであれば、考えなくもないが…」

優輝は（脅し？）と、少し思つた。

「ついでだから、俺らのも教えてやるよー。」

英樹が、話したそつに、話に入つてきた。そして、勝手に語りだす。「俺はな、“マインド・コントロール”って言つのを使えるんだ」「マインドって、あの、人を操るつてやつですか？」

「そうそう、よく知つてるな？まずくなつたら、それでよく切り抜けるんだ。言つておくけど、俺のは、後遺症が残るぐらい危ない力じゃねえからな」

椎の隣に座り、楽しそうに、まだ話そつとする英樹

「じゃあ、椎さんは…？」

「こいつ？こいつは

「悪いが、教えられない

英樹が言葉にする前に、椎に阻止された。

「えー、何でだよ。別にいいじゃん、盗まれるわけじゃないだろ？」

「これは、口での説明だけじゃ、信じる事が出来ないモノなんだ世間でも、めつたに知られていないし、名前すら聞いた事がない筈だ

だ

「聞いたことがない能力ですか

優輝は不思議そうな表情をして、言つた。

「ここまで話しさは、理解できたと思う。もつ一つのやつてている事は、俺達と似た力の奴を押さええることだ、悪用されでは、かなわないからな

そこまで言つと、立ち上がりビンカの部屋へ足を運ぶ

「あ、あの、あつちは何が？」

椎が行つた場所を指を指して英樹に聞く

「ん~？ あそこか？ 台所みたいな場所、何か作るんじやん？」

「そうですか？」

「ところでさ、ゆうちゃん」

「は、はい？（ゆうちゃん……？）」

慣れない呼ばれ方に戸惑いながら優輝は、返事をした。

「家事とか、得意だつたりする？」

「……はっ？ どうしたんですか、突然」

いきなりの質問にさらに戸惑う優輝

「あのせ、俺らの手伝い（アシスタント）してくれね？ 身の回りの事でいいし、それにバイトだつて思つてくれてもいい！ 無理について言わねーけどさ」

「まあ、得意じゃないですが、一通りは出来ます（両親とも働いてるから）……だけど」

「マジ？ やりー」

嬉しそうに、英樹は、台所だと言つた場所に向かつて叫んだ。

「しーちゃん！ 聞いたか？ アッサーするつてさあ、しかも、家事をほぼ担当で！」

「え、ちょ、あの、俺、まだ何も……！」

椎は、コーヒーが入つたコップを片手に持ち、壁に体を寄りかからせながら優輝を見ていた。

「ほう、それは助かるな」

「ですから俺は、まだ何も……！」

呆れた声を出す、優輝だつたが、その場の光景が変わる。

また、いつもの様に“飛んだ”のだ

場所は、同じこの事務所、何かを3人でしている… テレビ、そう、テレビを見ているのだ。そこには、死亡交通事故のニュース… さつ

きの事故の情報だつた。

口々に、3人で何かを話していたのだが、近くでパトカーの音を耳にした。外へと出て、サイレンのする場所へと向かつてみると、そこには、また更なる交通事故の姿があつた。

（まだ、別にたいした事でもないよな、こんなに見てしまつくらいなら交通事故の一つくらいは防いで）

何気なく横を見た時、一人の男の人と目が合つた。

「え？」

また、体がガクンと落ちた。

そこは事務所、椎は優輝に近づき、顔を覗き込んできた。

「“見てきた”のか？」

そう聞かれた。優輝は、小さく頷いた。

「な、何見たんだよ、教えてくれよ？」

英樹も教えて欲しそうに、反対側のソファーから身を乗り出して優輝に言つ。

「あ、あの…えっと、さっきの事故は、はつきりしたテレビの報道つて、何時くらいになりますか？」

その質問に、椎と英樹は顔を見合わせると、椎が答えた。

「夜中…そうでなければ、明日くらいだ」

「明日…（時間まで覚えてないし、朝か昼かも覚えてない、どう伝えよう）」

困った表情をした後、優輝は言つた。

「確信が持てたら、そく教えます。だから、少し待ってください」

そう、2人に伝えた。

それを二人は、了承する。

だけど、それより優輝が気になっているのは、あの“人物”だつた。顔は虚ろで覚えている自信はないが、服装は覚えていた。なんだか、変な雰囲気を“予知”だが感じたのだ…

（もし、あいつが本当だつたら、この事件は解決できるかもしれない

（い）

優輝は思った。

空が暗くなり、優輝は帰ることを2人に言つと、立ち上がつた。

「聞きたい事があつたんです。交差点で“メッセージ”つて俺に言つてたじやないですか、それは何ですか？」

「ん？ メッセージつて、さつき言つたあれの事？」

不思議そうな表情で、英樹は言つた。

「はい、聞いておこうと思つて」

椎が説明をする。

「そう言えれば、メッセージとしか言つてなかつたな、あれは自分の思つてていることを相手の意識に飛ばすんだ。だが、ほぼ一方的に送る・・・『言葉を届ける』と、考えててくれていい、簡単に言えば、伝えたいけど伝える事ができない場合は、“メッセージ”を残していくだろ？ 相手の意思も関係なく、それと同じで君はあの時、“助けて欲しい”つと願つた。たまたま俺達の意識に届いたんだ。だから、英樹が走つて、小学生を引き止めた」

「あの後、車が物凄いスピードで行つちまつた時は、マジでビビッたぜけど…ちなみに会話するんならコネクトつて言つんだつてよ？」

英樹は、笑いながらそう言つた。

「俺も驚きました…それじゃ、帰ります」

優輝は、頭を下げて、そのビルを後にする。

「英樹はどつ思つ、仲間になると思つた？」「

「なつてくれるつて、後は、明日待ちつて感じ？」

ソファーに座つてそつと会話を交わした。

「でもや、ビうじてしーちゃんの能力教えないのさ？ 俺、すげーつて思つたよ？」「

そう英樹が言つと、椎は、小さな溜め息をついて言つた。

「どうせ、見せれるんだ。今はいいだろ？」「

やう、話を流してしまった。

Psi(サイ)(後書き)

プリコグーション、あつたら便利かもしませんね。私もあつたら楽しそうだと思います。最近、ESPなどで面白い事を知つてきたので、それも話しに出来たらと思っています。次の話では椎の能力をちょっとお披露目すると思います

優輝は、ぼーぜんとしている。

呆れた顔で溜め息をつく。

何に対しても、そんなりは、自分に対してに決まっている。

理由は、今いる場所にある。

あの、自称『何でも屋』のビルから出て、家に帰り、普通に寝て、朝、学校に行つた。

珍しく、今日は何も起きなかつたその帰り道、嬉しさに軽い足取りで歩いていて、今に至る。

「まあ、来るつもりだつたから別にいいんだけど…」

自分に呆れるように呟くが、溜め息付く暇も無く、扉が開いた。

「うわっ！マジで来た」

優輝は、どうやら、無意識に足が向いたらしい

出迎えてくれたのは、言つまでもない浅茅英樹であった。

勿論、優輝が来た場所は、『何でも屋』だつたりする。

入れ入れと、背中を叩かれしぶしぶと中に入る優輝、最初に目に入るのは、あのソファーー

そこには、しーちゃんこと椎が座つている。

優輝は、別のソファーに腰を下ろすと、椎に話しかけた。

「あの…」

「ん？ 何？」

「椎さんは、仕事とかしてるんですか？」

何気ない話題をふつたつもりだつたが、椎は不思議そうに聞き返してきつた。

「…どう言つ意味だ？」

「いや、椎さんて、真面目だから普通の仕事もしているだろうなあつて」

そこまで言つと、椎の顔が…いや、全体的に沈んだ様に見えた。

「あの、椎さん？」

「辞めたんや、こいつが、まともに此処で仕事せえへんし」
優輝は、『仕事をやめなぐても』と、言いたかつたが、言わないでおく。が、

「しーちゃん、仕事やめなぐても良かつたんじやないのか？その方が、まだ、まともな暮らしが出来たかもしないしさ！」

優輝の心が見透かされたように英樹は、椎に突っ込む。

「うつさいわ、こつちにも事情があんねん！それに、お前には言われとうない」

一人の会話に苦笑いをする優輝。

ムスッとした顔で英樹は、ソファーに座ると、テレビをつけた。

『昨日、また 町で』

昨日の『コースだつた、鮮明に詳しく述べてテレビで流れている。3人は黙つてみていた。

英樹は、何を考えているかも分からぬ表情で、ボーとして、（もしかして考えて何も考えていないかもしない）見ていく。
椎は、考えるように、テレビと睨めっこをしている。

「そう言えば、英樹さんで、『マインド・コントロール』って人を

“操る”んですよね？」

「ん？ いきなりなんだよ、ゆづちゃん。そりやあ、俺の力は、人の記憶を」

そこまで言つて、優輝を見た。

「へんなこと考えてる？ 考えてるだろ？」

「え、いや、その……まったく考えてないですよ？」

勿論、考えていた。自分がやつていないと言つ、運転の人、何かに操られていたのではないかと思う。そうじやなれば、あんな無謀な事故が起こるわけもない。

「お前も英樹と同じ事を言つんだな。こいつの持つている力は、君が考えている、そう言つのじゃない」

そう、切り出してきたのは、椎だつた。楽しそうに笑いをこらえな

がらそう言つ。

「そ、そつなんですか？」

「ほり…やっぱり考えてたじやん…！」

怒る英樹をなだめながら、椎は言つた。

「いつとくがな、マインド・コントロールは、“記憶の操作”あんな物騒な事は、できん

「それにな、相手と田を合わせなこと無理なんだよ

ムツとした英樹が言葉を続けた。

「田を合わせるか…」

時計が、5時を指した時、遠くからサイレンのよつな音が聞こえてきた。

「サイレン…え、サイレン…！」

優輝は、慌てた。

「どないしたん」

椎が真剣な顔で聞いてくる。

「来て下さい！」

飛び出していく優輝の後ろを2人は、追つ。

「何か、ワクワクするな？しーちゃん、よくあるテレビのサスペンス劇場みたいな？」

目を輝かせながらそつ言つ英樹に、椎が呆れて言つ。

「お前だけや、アホ」

サイレンが近づいていく…ひさしひさ、優輝の狙いどおり、交通事故の現場に到着したようだ。

「またか…」

「うわあ、こりゃまた運ちゃんダメじやん？」

椎と英樹がそつ言葉を交わしている中、優輝だけ辺りを見渡している。昨日の“あれ”が本当なら、きっと居る筈だと、何故か確信していたから

すると、何かがピシッと感じた。

「え…（何だこれ？）」

椎と英樹も感じたのか、身を構える。3人は、誰かと何らかの形でシンク口をしてしまったようだ。

そして、優輝が何気なく、ある場所をみた瞬間、気がつく。「居た！英樹さん、椎さん、あの人だよ！」

えつて顔で一人も指を指された方向を見る。

そこには、英樹もビルの屋上でマークした男がいたのだ。

「あ、あのおつさん！」

「あいつか…追うぞ」

椎と英樹が同時に地を蹴った。

男も、気がついていたのだろう、2人が走つてくる数秒前に背を向けて野次馬を押しのけながら逃げていた。

英樹達が男を追う、野次馬達のせいで男との距離を少し離されてしまつたが、何とか、追いかけることができた。

「くそつ！」

男が叫ぶ、道沿いを曲がった先が行き止まりのビルの壁だったからだ。

「やつと、追いついたぜ？大人しくしろ！」

英樹が壁側に立つ男を人差し指でビシッと指し声を張つた。だが、男は、動じない…自信満々の笑みさえ見せる。

優輝は、小声で英樹に耳打ちする。

「まずくないですか？」

「なんで？」

「だつて、向こう自信満々に見えるんですけど…」

「ん、そうみたいだな」

嬉しそうに言う英樹に少し、不安を覚える優輝

遠くでは、サイレンと野次馬の声が聞こえてくる。それだけで、この空気が、どれほど沈黙しているのかが分かる。何を合図にしたのか、英樹が、男のふところめがけて飛び込んでいった。

「ちょ、英樹さん！」

男の笑みは、そのまま、相手も~~Ps~~なら何をしでかすか分からない。

冷たい空気が流れる。

優輝は、椎を見るが無表情でただ男を見ている。何かをする訳ではないのは、その顔を見るだけで分かる。

だが、何も起こらず、英樹は、男を殴つた。

ガツ
ガタンッ

無様に倒れる男は、慌てて声を上げる。

「な、何故！ 何も起こらん！？」

「ん？ 制御できていないんじゃん？」

ふざけているのか、英樹は嬉しそうに男に言つた。

そして、胸ぐらを掴んで英樹は質問する。

「お前、何であんな事をしてたか教えるよ」

「…」

「無言か」

椎が、あたかも当たり前なように言葉をもらす。

「お前ら、俺に何もできないこともしたんだう？」

男は、英樹達に食つて掛かつた。

「お前に関係ないじゃん… それに」

何かを言おうとした時、野次馬側がうるさくなつてきた。3人は（1人除いて）音が聞こえる方に、目を向けると、何かが走つてくる。見覚えがある。無い方がおかしいかもしねり。

「…」

爆発するようにぶつかつた音がした。ビルの壁には、燃えている車

…さらに、周りに野次馬が集まる。

「うわっ… 英樹さん無事ですか！？」

「一応、だけど、逃げ出すだけであいつ助けるの失敗した」

そう言いながら少し煤だらけのような格好で歩いてくる英樹の姿を見て椎と優輝は、安堵する。

「悪い、俺が力を使うのを止めたばかりに、油断した」

椎の言葉に優輝は、少し考えてから驚いた。

「え、力つて！ いつの間に！ 分かりませんでしたよ？」

「あ、しーちゃんの能力説明してねーもん、普通分からねえって」

警察が駆けつけたのが、サイレンの音だけで分かつた。

それを聴いた3人は、慌てて現場から離れて、自分達のビルに戻る。脱力する3人、いまいち状況が掴めていないのは、優輝なのかもしない、仲間だと言われて初めて出会った人達の事を知らなさすぎるからだ。

脱力する2人に優輝は、話しかける。

勿論、知りたいのは色々あるが、今は一番身近な事が知りたい。

「あの、椎さんの力つて？」

单刀直入聞いてみた。

椎も、別に隠すつもりなど無いのだろう、あっさりと話してくれる。

「俺の力は『アンチ・サイ』って言つんや」

「アンチ・サイ？」

本当に聞きなれない名だった。

「だけど、お前だつて見ただろ？」

英樹が嬉しそうに優輝に語りかける。

「え？ 俺には全然…」

分からぬのも仕方が無い、だつて

「俺のは、『超能力を無効化』にする力があるんねん」

これが、椎の力だった。

だから、昨日、口で説明できぬものは、教えたくないと言つたのだろう。

優輝もそれに、納得できた。あの時、いきなり英樹が飛び掛つたわけも、ちゃんと椎の合図があつたからなのだ。

だから、あんなに容易く犯人であるうつ男を捕まえる事ができたのだ。

だけど気がかりな事があった。

「あの車…いつたい、あの人自殺したんですか？」

それは、優輝の疑問であつて、椎と英樹の疑問でもあつた。

次の日のニュースは、2回続けての事故の話でもち切りになつたが、それ以降、不可解な交通事故が起こることは無くなつた。

アンチ・サイ（後書き）

何とか…書けたかなと思います。

これから、色々なPsiを出すなくては、と、少し張り切ってみたりします。

アンチ・サイのサイは、Psiの「サイ」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3942a/>

～ Esper ～ 何でも屋営業中

2010年11月10日14時28分発行